

# 市原市草刈六之台遺跡の縄文早期貝層 —補遺—

西野雅人

## 1. はじめに

草刈六之台遺跡は、千葉県市原市の北端部に建設されたニュータウン「ちはら台」の一角に存在した。

1980年から1988年にかけて、当センターが断続的に発掘調査を実施し、1994年に報告書を刊行している<sup>1)</sup>。筆者は、縄文時代の遺構と人骨・動物遺存体の整理と執筆を担当した<sup>2)</sup>。そのなかで、早期後葉の遺構内貝層から採取した貝サンプルのうち、実物が見つからないために未報告となったものがあって、以前から気にかかっていた。ところが、最近になって別の遺跡の出土遺構不明とされていたものが、問題のサンプルであることが判明した。この時期のものとしては規模の大きい貝層であり、遺存状態も良好である。そこで、この場でデータを公表することで報告の補遺としたい。なお、当該資料は、この報告をもって報告書掲載の扱いに加えることにする。

## 2. 1021 B号炉穴と貝サンプル

問題となった貝サンプルは、8基の炉穴と1基の土坑が重複した1021号遺構（第1図）のうち、B号とした部分に入っていた貝層から採取された。貝層の規模は長さ2m、幅60cm、厚さ60cmほどある。1021号一括で取り上げられた土器から、貝層の時期は茅山下層式期と考えられる。採取・保管されていたサンプルは土囊



1021 B 炉穴の貝層

袋に2袋、31リットルあり、すべてを分析対象とした。なお、袋には誤って草刈遺跡C区遺跡のコードが書かれていたため、この遺跡のものとして保管されていた。

## 3. 分析結果

今回記載するものを合わせると、当遺跡の早期後葉の貝サンプルは3試料となる。いずれも茅山下層式土器を伴う（第1表）。分析の結果は報告済みの2試料（838A・974A）と併せて掲載する。1021B号の事実記載とともに、比較の結果にも随時触れてみたい。

第1表 早期後葉の貝サンプル

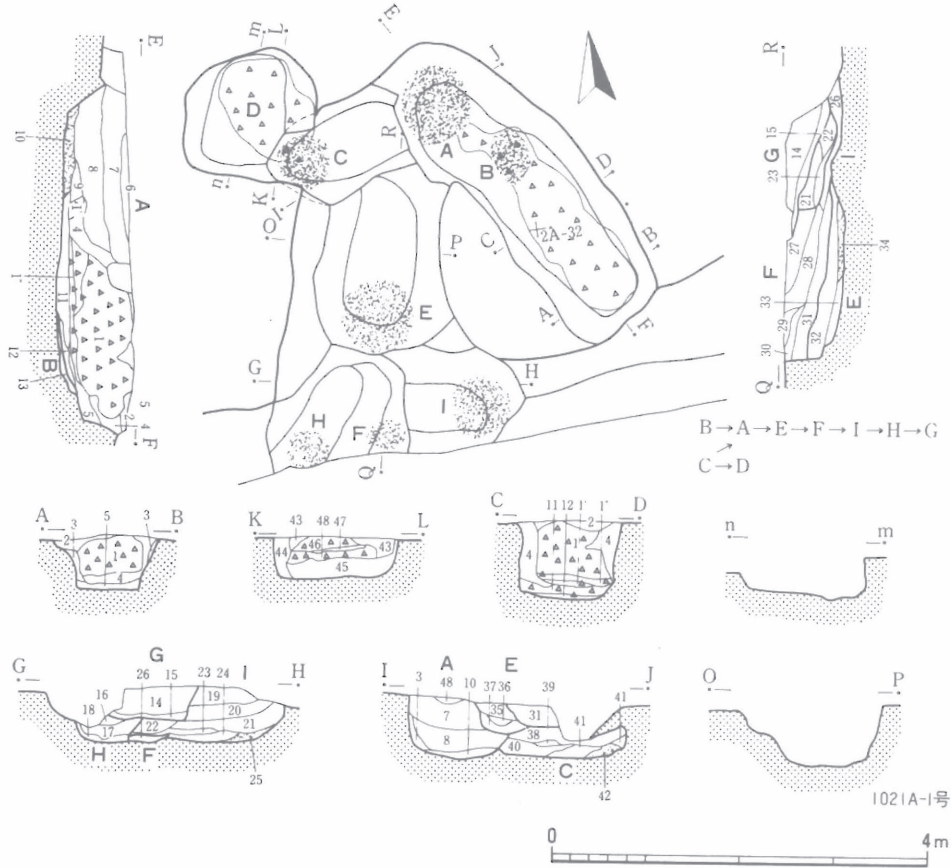
貝層名	時期	遺構	カサ数	分析量
1021B	茅山下層	炉穴	1	31.0%
838B	茅山下層?	住居跡	1	?
974A	茅山下層	炉穴	1	?

**貝種組成** ハイガイがほとんどであり、ハマグリとマガキが若干混じる。主要構成種以外ではシオフキガイ、オキシジミ、アサリ、マテガイが食用に採取された可能性が高いが、いずれもごくわずかな量である。イチョウシラトリガイは村田川右岸のボーリング調査によって、自然貝層で検出されている<sup>3)</sup>が、遺跡に持ち込まれることは少ない種である。村田川水系の貝塚では初めて記載されたものと思われる<sup>4)</sup>。ウミナナ科としたものにはイボウミナとカワアイガイがみられ、マガキが付着しているものがほとんどであった。採取したマガキとともに運ばれたものであって、食用に持ち込まれた形跡はない。

**ハイガイ** 殻長20~30mm前後が多く、40mmを超えるものは皆無である。974Aはさらに小さい。838Aは25~35mmが中心で、40mm以上の大きな個体もみられる。ハイガイの生息条件の差（時期差・漁場の違い）を示すものであろう。なお、当サンプルのハイガイには左右の貝殻が合わさった状態で検出された「合弁資料」が多い。最小個体数2,784個のうち256組、1割弱が合

弁資料である。ハイガイのような多歯型の鉸歯をもつ貝は左右の殻の開きが悪いので、身を食べるために一度殻を開けても、堆積後に再度閉まる率が高いかもしれない。が、本例のようにとくに合弁率が高い場合には、煮ても身を取り出さなかったか、または調理せず

に廃棄された可能性も考慮する必要があるだろう。そこで、計測は非合弁と合弁各200点を対象としたところ、非合弁は平均27.80mm、合弁は25.35mmで、合弁資料のほうが若干小さかった。貝の入った鍋料理であっても、身をすべて食べたわけではないこと—大きめの貝



- A号
1. 混土貝層 中・小型ハイガイ主体、小型ハマグリ・シオフキ・カキ・ツメタガイ少量
  1. 混貝灰層
  1. 混貝土層
  2. 黒褐色土
  3. 黄褐色土
  4. 暗黄褐色土
  5. 暗褐色土
  6. 暗黄褐色土
  7. 暗褐色土
  8. 黒褐色土
  9. 黒褐色土
  10. 焼土
  11. 暗黄褐色土
  12. 黄褐色土
- B号
13. 暗褐色土
- G号\*
14. 暗褐色土
  15. 暗黄褐色土
- H号
16. 暗褐色土
  17. 黒褐色土
  18. 暗黄褐色土
- I号
19. 暗褐色土
  20. 暗褐色土
  21. 暗褐色土
  22. 暗黄褐色土
  23. 黄褐色土
  24. 暗褐色土
  25. 焼土

- F号
26. 暗褐色土
  27. 暗褐色土
  28. 黒褐色土
  - 29.
  30. 暗黄褐色土
  31. 黄褐色土
- E号
32. 黒褐色土
  33. 暗褐色土
  34. 焼土
  35. 暗褐色土
  36. 暗褐色土
  37. 暗褐色土
- C号
38. 黒褐色土
  39. 黄褐色土
  40. 暗褐色土
  41. 暗褐色土
  42. 焼土
- D号
43. 黒褐色土
  44. 黄褐色土
  45. 暗褐色土
  46. 混土貝層
  47. 混土貝層
  48. 混土貝層

\*G号の掘り込みは平面図に記録できなかった。

第1図 1021A-I号炉穴

を選んで食べたこと一を示す可能性を考えたのであるが、サイズの違いはわずかであって有意な差とはいえないようである。

マガキ 殻高20~50mmの小さなものばかりである。このほかにイタボガキ科としたものも、おそらくマガキの幼貝である。成貝の着生痕について観察可能な30

点を選んで記載したところ以下のものであった。

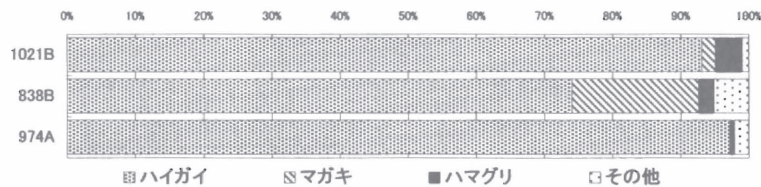
- A：付着痕なしorマガキ同士 12点
- B：付着痕あり、対象不明 2点
- C：二枚貝に付着 0点
- D：棒状のものに付着 3点
- E：ウミナナ類に付着 13点

第2表 貝種同定結果

種名		1021B	838B	974A
ツボミガイ*	<i>Patelloida pygmaea lampanicola</i>		9	
スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i>		3	
ウミナナ科	Potamididae gen. & sp. Indet.	9	9	
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>		2	1
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>		0	2
イボニシ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>		1	
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	2,784	986	464
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	46	249	0
イタボガキ科(幼貝)**	Ostreidae gen. & sp. indet.	15	-	-
シオフキガイ	<i>Mactra quadrangularis</i>	11	2	1
イチョウシラトリガイ	<i>Merisca capsoides</i>	2		
ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i>		38	
マテガイ	<i>Solen strictus</i>	1		
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>			6
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	1		
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	116	29	3
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	5	3	0
オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>		1	
	合計	2,990	1,332	477

\*報告書ではユキノカサガイ科

\*\*838A・974Aでは抽出していない



第2図 貝種組成

第3表 貝類計測値

mm	ハイガイ殻長			マガキ殻高		
	1021B	838A	974A	1021B	838A	
-5.0						
-10.0		1				
-15.0	4	1	1			
-20.0	22	12	41			1
-25.0	83	91	199	3		1
-30.0	230	314	88	7		1
-35.0	59	209	20	5		1
-40.0	2	122	5	4		2
-45.0		23	2	7		4
-50.0		9		2		
-55.0		1		1		1
-60.0						2
-65.0						1
-70.0				1		1
-75.0						3
-80.0						1
-85.0						1
-90.0						
-95.0						
-100.0						1
試料数	400	783	356	30	21	
平均	27.80	30.29	23.98	36.16	52.92	
標準偏差	3.14	5.44	4.03	9.56	21.23	

「付着痕なし」を含めてマガキ同士で付いているものもあるが、同程度にウミナナ類に着いたものがみられる。カキ礁は形成されておらず、良好な付着対象が少ない状態であまり大きくなれなかった可能性が高い。これとは対照的に、838Aでは着生痕不明のマガキ同士で着いていたと思われるものばかりで、例外はウミナナに着いたものが2点見られたのみである。かなり大きな個体もあり、サイズのばらつきが大きい。おそらくカキ礁を形成するものを採取したものであろう。ウネナシトマヤガイやスガイもカキ礁の形成を示す証拠となろう。

#### 4. 貝サンプルから検出したツノガイ製品

貝サンプル中からツノガイ類を折断・加工した可能性の高いものを検出した。径6.2mm、高さ3.7mm。折断面の一方は剥離するが、もう一方は折断された面が摩滅して光沢をもつ。おそらく白玉のように使われた装飾品であろう。ツノガイ類は潮間帯下部より深い海域に生息しており、貝塚出土資料の多くは沖合から打ち上げられたものを海岸で拾ったか、または自然貝層で採取したものであろう。したがって、加工痕が認められなくても装飾などの目的をもって運び込まれ、所有された可能性が高い。ツノガイの装飾品は、長野県栃原



ツノガイ製品 (1/1)

岩陰遺跡、愛媛県上黒岩岩陰遺跡など縄文時代の初期から存在し<sup>4)</sup>、千葉県下でも中期から晩期に類例が多い。しかし、早・前期は少なく、貴重な例といえよう。

#### 5. まとめ

炉穴は33群107基以上、住居跡2軒が検出されている。ただし、炉穴の集中する台地西端部は、周囲が調査前に削られている。また、炉穴の分布が散漫な台地中央から東側は、弥生から古墳時代の住居跡によって失われたものが多かったものとみられる。本来はおびただしい数の炉穴群が存在したであろう。今回比較データとして取り上げた838号住居はおそらく長軸10mの大型住居である<sup>5)</sup>。村田川右岸下流域にはこの時期の炉穴群が集中するが、住居跡はとても少ない。六之台遺跡は、遊動性の高い居住様式をもつ集団が繰り返し利用した中心的な場所であった可能性が高い。この場所が選ばれた理由のひとつは、すぐ下に海岸があって、海産資源を利用しやすいことにあったことは疑いない。

#### 注

- 1) 白井久美子他1994『千原台ニュータウンⅥ-草刈六之台遺跡-』千葉県文化財センター
- 2) 報告書の凡例にある執筆分担のうち第3章に誤りがある。正しくは、第1節グリッド出土土器・加納実、第2節石器・田島新、第3節遺構・西野雅人、第4節遺構出土土器・上守秀明である。
- 3) 松島義章1979「木戸作貝塚周辺の沖積低地」『千葉東南部ニュータウン7 -木戸作遺跡(第2次)-』千葉県立中央博物館黒住耐二氏に同定していただいた。
- 4) 土肥孝1997『日本の美術369 縄文時代の装身具』
- 5) 報告書執筆当時は、当地域に同様の遺構が存在することを知らなかったため、何軒か重複している可能性と、大きな住居跡1軒である可能性を併記した。その後、県内の類例をいくつか知った。いわゆるロングハウスの可能性が高い。
  - ・神崎町草毛Ⅱ遺跡(田戸下層式期)
  - 越川敏夫「縄文時代」かとり5、香取郡市文化財センター
  - ・市原市諏訪台遺跡(条痕文系土器期)
  - ・大網白里町山田台No.4B遺跡(野島式期)
  - 青木幸一 2000「大網山田台遺跡群No.4(B)遺跡」
  - 千葉県の歴史 資料編考古1